

弩真ん中を知る

㊦

三月十二日

兎玉雨子

先の東日本大震災をテーマに、都市や同じ国に住みながらも生じた「痛みのギャップ」そのものを描き、私なりに何か伝えられたらと思い、この作品を掲載することに至りました。

あくまで作品中での世界ですが、読んでいただく方の中には、不快に感じられるであろう表現があるかと思えます。特別な思想や意見ということではありません。一作家の表現の方法のひとつと、なにとぞ作品のご理解をよろしくお願い申し上げます。

月明かりを見たあと、私と葉子はそれまでの疲れに突然縛られたように、こんな事態とは言ってもせつかく二人夜を一緒に明かすのに、鉛のように床に吸い付き沈み溶けそうなほどに深く重く強く眠った。二〇一一年三月十一日から十二日まで、一日を跨いだ眠りではなかった。ただ抜け殻のように、だけど惰性で、ただ単にタイムスリップしたような夜だった。

他人の家に泊まらせて頂いてる感覚は寝ても醒めても、急かすように罪悪感のようにのしかかってくる。

朝が来たのは、目覚ましでもなく葉子のおばあちゃんが朝だよおと、少し苛つくようなけだるく隙のない声で起こしてくれたからだ。苛ついてはいけないけれど、朝を起こす声は誰でも嫌いだと思う。それにつけっぱなしのコンタクトのせいで目がからからに乾いていて、起き上がると肩や腕や腰がだるくて、もし今自分の部屋で、日曜の朝だったら。そのまま十一時ぐらいまで寝ていたかもしれない。少し朝陽がさしこんだ部屋の時計を見ると八時すぎぐらいで、なんだまだ八時じゃあんいいじゃん寝かせてよおって、一瞬でも不機嫌な顔をしていなかったか少し心配だった。まあ葉子が「つるせえなあ」と先に言ってくれたのが救いだった。

「もう電気大丈夫だから、携帯充電しときなよ。あさごはんは？」
おばあちゃんが言うと、葉子はすぐに鞆から携帯の充電器を出して、うつむきながらリビングのコンセントを探しだして、すぐに差しこんで充電をさせた。

「いい、どつか食べてくよ」

「だあいじょおぶ？」

「大丈夫」

「さいとー、コンタクト洗う洗面台あるから。あと充電もしとくね」
昨日は暗くてよく見えなかった葉子のすっぴんが、その、普段た
まに朝とかもすっぴんなんだけど、もっともっと今まで以上に丸裸
というか本当の顔というか、ほっぺに水を注射したみたいにくん
で腫れていた。

トイレとコンタクトの洗浄液を借りようと思って廊下に出たとき
に、ブーツブーツと振動する音が鳴った。きっと葉子が私の携帯を
充電してくれているのだろうか。それまで無駄に緊張していた何か
が弛んで、安心がひとつ増えた気がした。携帯の充電は、余裕の充
電なのだ。

コンタクトを外して軽く洗って、もう一度瞳に透明の薄い膜をは
めると、洗面台の鏡に映る私もいつもよりむくんでいるように感じ
た。目は小さく、まぶたはもっちりしていて、ほっぺも少し赤らん
でいた。風邪でも熱でもない。ファンデーションをしていない起き
たての肌は、なんで少し赤いんだろう。今日はもう帰るだけだし、
もういいかな。どうせ遊べないしこのだるさは帰ったら一日寝てお
しまいなかんじもする……化粧を諦めて顔を洗い、近くにあった化
粧水を借りて、髪を軽くとかしてみた。寝癖はついていなかったけ
れど、いつもよりぱさぱさな感じがした。

用を済ませて部屋に戻ると、すでに制服だけ着替えて歯を磨くす
っぴんの葉子がいた。葉子は毎朝、服を最初に来てから支度をする
のかな。おばあちゃんは居間のテレビで耳にやさしくない声のニュ
ースを、コーヒーを飲みながら観ていた。葉子もなんか神妙な面持
ちで、細い眉毛をしかめながらテレビを睨んでいた。

「ホオエ〜」

葉子が口から歯磨き粉を溢さないように唸った。たぶん、コエ〜

って言ったんだ。

「津波なんてどうやっても逃げられないわよねえ」

「ウオゥ」

私は、なんでだろう：「かなんなあ」ってフレーズが出てきた。

敵わないなあってことなんだけど、それが私の知らない声と普段聞き慣れないイントネーションで、かなんなあって。

「ああ、あんな、ねえ、家ごと流されてるよお」

「ブブツ」

葉子は慌てて洗面台まで走って、口の中の歯磨き粉をブエって吐き出していちいち音を立てながらきれいに口を洗った。リビングと居間に取り残されて、おばあちゃんと昨日であったばかりで何の会話のネタも持っていない私は適当に「こっわあい」と言ってみた。たぶん、この子馬鹿っぽいって思われた。どたどたと足音だけ怒ったように戻ってきた葉子が来てくれてほっとして、その、知らないひとと新しく出会うコミュニケーションってどこまでもめんどくさいなって思った。学校にいと、いちいち新しく友達になったりすることが少ないし。中高一貫校だと猶更、友達の作り方もはじめまでの声の出し方も全て忘れちゃってる。

「なあんか、斉藤のすっぴんって赤ちゃんみたいだね」

「なにそれ」

葉子はおばあちゃんがコーヒーを啜っているのを忘れるような、誰にもこれっぽっちも気を遣ってないように話し出す。昨日は周子がああだこうだ言ってわりと気にする方なんだなって思ったけど、やっぱり周子はいいい意味で基本周りを気にしてないんだった。

「ぶりぶりしてる」

「まあ……たしかにニキビできないから」

さっきの少し赤いほっぺを少しさすった。ニキビもないし、そばかすもないけれど、特別きれいでもないから……。

「きれいだけど、化粧してるときのきれいさとすっぴんの肌のきれいさって、違うくない？」

「どうしたの突然」

「うち肌白いじゃん」

葉子がそっけなく自慢する。ごつごつした顔がやわらかく綿みたいな茶髪に包まれて、似合わない。

「うん」

「それだけ」

「えっ」

「早く着替えろお」

なんだかよくわからないけれど、私はゆるく急かされた分だけ急いで着替えた。脱ぎっぱなしにするとおばあちゃんに悪いから、上を一気に脱いだら服を着る前に上半身すっぽんぽんで肌着とスウェットをばりっと引き剥がして、畳んでから下着をつけてヒートテックを着てワイシャツのボタンを閉めて。おっぱいを見られるのはもういいかなって、思ってしまった。だって女しかないし。でも少し葉子はびっくりしたように私の胸のあたりを見て、ちょっと視線を逸らしてなんもないような顔をして「ぺちやぱい」と言った。

「うるせー」

まだ油断は出来ない。なぜか、おっぱいを見られるのはわりとあっさり済んだのにパンツを見せるのは恥ずかしいからスカートを着いてから下を脱いで、軽く折りたたんできちんとした子って思わせるように脱いだ服を揃えた。とても、とても気を遣った。

「横浜線動いてるみたいだよ」

リモコンのボタンを沢山押しまくって、葉子がテレビのチャンネルを変えまくっても、まるで放送事故みたいに画面がおんなじような津波の映像、がらくたとか新しい芸術みたいな壊れた家、テレビ局内の揺れ始めたときの固定カメラの映像、さっきの葉子みたいに眉をしかめるアナウンサーやタレント。画面の下や上には絶対交通情報や警報。揺れを感じないのに頻繁に地震速報が流れて、東北とか私にはまったく関係のない地域の名前がずらりと白い文字で並ぶ。

「そんな大きなものだったの」

「あんた昨日コワイコワイ言ってたじゃん」

「いや、そうなんだけど、なんかここまで大ごとなんだね」

「まあ電車は動いてるから帰れるっしょ」

電車は動いている。そうだ。私の家は大丈夫なのだろうか：お母さんが、お父さんが、昔気違いみたいに集めまくっている高級なんだか知らないけどお皿とかワイングラスとかは割れてしまったのかな。どうなんだろう。

葉子も今日は化粧をしないで帰るらしい。「どうせ帰って風呂入って寝るだけ」って言っていて、私たちは似ているというか、それだけしかやることがない。学校があるはずないし、塾もたぶんない。家で勉強するのに化粧をする人がいるわけない。外は危ない。それだったら、周りを気にする必要もない。葉子は私が着替え終わると、二分ぐらいで顔を洗って化粧水を頬に叩いてリップクリームを塗り、ふわふわした髪は手櫛でさまになった。それだけで、もう準備は終わる。髪や顔を色々しなければ、ごはんも外で食べるとするならば、家での支度なんてほんのわずか。なのにもいつも、家を出る一時間も前に起きて余計な準備をするのかって思うけれど、だって誰かが見ていることを考えたら、こんな目と肌と唇じゃあ電車にも乗りたく

ない。たまたま誰かに：たとえば好きな人に会ってしまったらどうするの？ まあ、そうやって仕込みをすればするほど、都合よく偶然なんて起こしてもらえないけれど。

乱暴に葉子は携帯の充電器ごとコンセントからぶっこ抜いて、鞆の中に放り投げた。私は一度おんなじように充電器を抜いて、そして携帯と充電器のへその緒を引きちぎった。四十パーセント近くしか電池は無かったけど、大丈夫、だって帰るだけだもん。

「おばあちゃんありがとね、ママに連絡しておくから」

狭い正方形の玄関で二人で履くと、おばあちゃんが何か一生懸命というか、せかせかせかした様子でドアの前で何度も何度も「大丈夫？」とか「気を付けて」とか言っていた。私が答える必要は無さそうだから、最後に一言本当にありがとございました、と満面の、先輩や先生へ向けるような笑顔を作った。葉子はうざそうに「だいじょーぶだからだいじょーぶだから」とやり過ぎした。

玄関を出て階段を降りて路側帯の上に立つと、私たちはほぼ同時に携帯を開いた。電波は通じているようで、溜まっていたメールやメッセージが届いていた。お母さんから「了解。気を付けて帰ってきてね」とあって、お父さんからは「大丈夫？帰ってきたらまた連絡下さい」とあって、イトコからは「東京大変らしいな」と来ていた。イトコは大阪に住んでいて、関西の人って文字面だけでも関西弁なんだね。ミクシイやツイッターを開くとメッセージは無くても、でも沢山みんな大丈夫？系のつぶやきだとか、余震気を付けてだとか、これから降る雨は石油が混ざっていて人体に有害なので雨に当たらないように：：：とか：ちよつと怖い。

「石油の雨だって、こわくない？なんか雨ってガチくさくない？」

「はは、なにそれコエー」

絶対葉子は怖くないんだと思う。今は携帯に來た連絡に対して返すのが精一杯だから、私の言葉には適当に返してる。でも本当だったらどうしよう？よく漫画とかで真っ先に死ぬのは、こうゆう儒法をないがしろにして平気平気くって笑ってるやつらが先に死ぬ。主人公とかそれに近い登場人物は細部までこだわって、どんな情報をも伏線にして動く。私は死にたくない。死ぬ死なないっていうのは言い過ぎかもしれない。けれどさっきのテレビの映像を思うと、急に、やばい、死なないことはない：私、本当に死ぬかもしれない：死ぬことだってありえないわけじゃない：！

怖くて怖くて死ぬ前に死にそうになってきた。そういえば昨日真っ暗でよく見えなかった街が、朝陽ではっきりとよく見える。人通りはそんなに多くないけれど、バス停までの道で犬を連れて散歩している人を見かけた。まただ。昨日も見た。犬を散歩するのってなんか中毒なんじゃないの？昨日あんなことがあって、一秒先に何かあるかわからないのにルーティーンを当然の如くこなせるひとつ、ちよっと異常な感じがしてきた。それはバスに乗っても変わらなかった。まずこのバスがまた昨日よりも大きな地震で、たぶん津波は來ないとは思うけど転倒とかしたらどうなっちゃうんだろう。どっち側が地面になってどっち側の人ひっくり返ってしまうんだろう。危険予測に終わりは無かった。でも、真っ先に死ぬタイプであつても葉子がいたから少しは不安も掻き消された。携帯のメールチェックを終えた葉子は、いつも通り、いやいつも以上に：まるで昨日の夜に話し込みそびれた分を取り返すように、饒舌に喋りはじめた。そしてその分私にも引き出させはじめた。

「斎藤って野島と最近どうなの」

「はっ…えっ…？」

「野島のこと好きでしょ」

「いやそうだけどそりゃそうだけどなんで急にそんなつえっ」

「だってヒマだからさあ、最近なんか変わったこととかないの？」

「知らんよそんなの」

「えーつまんね」

「葉子はないの？」

「うち好きな人いないし」

「そうだけどヒマなんだもん」

「なんか野島との過去話とかないの？つまんねえ、昔付き合ってたんでしょ。なんか話せよ」

「なんでここで元彼の昔話しなきゃなんないのお、はずかしいイ。それになんかほんとにすっかり忘れてた。頭の中にいなかった」

「あのね、緊急時に思い浮かぶ人じゃなかったらそれ本当に好きな人とは言えないから。家族のことを思うのは当たり前じゃん、自分はもちろんじゃん、そこに誰かが出てきたらその人は一番好きないとだよ」

「なになにどうしたどうした」

「だから、野島のこと考えたかって、きいてんだよ」

「なかったわ〜」

照れ隠しなのかもしれないし、もしかしたら無意識に考えていたのかもしれない。もし野島がミクシイもツイッターもやってたら、きっとものすごくタイムラインを追いかけて探してしまうかもしれない。リプライやコメントが来ないか、頭いっぱい期待しちゃうかも。でもそんな繋がりが無い。地震があったことを口述にメールは出来ない。宿題のこととか、みんなで遊ぶときに待ち合わせの連絡とか、そっちの方が使えるネタなのに。葉子がそう言い出すから、

何か話題にならないか少し考え始めた。帰れた？なんて突然メールしたら完全に怪しまれる。無理して自分から仕掛けるのは不自然だから、偶然が起ることを待っている。

「あんたら最寄同じじゃなかった？」

「ああ：私は菊名だけど、野島はそこから東横だから：近いっちゃ近いけど地元がめっちゃ近いってわけでもないし：そんなにぼったり会ったりしないよ」

「へえ、意外。なんかもっと朝とか同じ電車乗ってるのかと」

「前は、付き合ってるときは、合わせたりしてたこともあったけど、なんかしなくなっちゃった」

「てかさ、なんか準備万端というか、めっちゃ顔が盛れたときとか、一番見てほしいときに限っていないことってない？」

「……今日の葉子なんかすごいね」

「冴えてる？」

「ギンギン」

「いやーなんかさあ、これ私だけかなって思ってたんだけど、たとえばうちに好きな人がいるとします。で、今日めっちゃ早起きして髪巻いたり化粧頑張るとします。駅着きます。いつも好きな人が乗ってる電車です。乗ります。いませんっていうの、ない？」

逆に、もうめっちゃ遅刻ギリギリですっぴん髪ぼさぼさで終わってる日になぜかぼったり会うっていうフシギ」

「あーあるあるあるあるわかる！」

「やっぱり」

野島、野島のことなんて、もう忘れていたよ。電車に乗る前はいつも気になっていた。町田の下りエスカレーターに、野島の靴が流れてこないか。菊名の乗換口と出口の精算機に、野島が並んでいな

いか。いちいち気にしていられたのはなんにも考えていないから、話すきっかけを待っていただけだったから。好きという気持ちも、しばらく会わない時間や話さない時間が経ちすぎるところやって私的されないと思ひ出せなくなってくる気がする。

バスターミナルへバスが走り込んでいくと、昨日よりも人通りは少なくて、駅にもそんなに人がいなかった。昨日閉められた改札はまた開かれて、サンドウィッチやジュースが散乱した床はきれいになっっている。ダイヤは乱れて電車は徐行運転、電光掲示板には時間は載っていないけど、各駅停車桜木町行の電車が並んでいる。昨日のことがまるで私の妄想みたいに、日常が日常らしさを立て直そうとしている。

野島を思い出してから、エスカレーターから徐々に見えるホームに男子高校生の制服を目で追う。ホームについてそれらしき人がいないことに気付くと、やっぱりね、と心の中でつぶやく。それでもエスカレーターから彼の足が見えるのを、全く期待していないわけじゃない。

電車に乗り込むと、満員というわけじゃないけど席が埋まっていた。けれど長津田で半分ぐらいが降りたので、私と葉子は席にすわった。葉子は「やばい寝るわ」って言って、黙って目を閉じた。私も肩や背中が依然しびれたように疲れていたけれど、妙に目が醒めて眠れなくて、 아이폰を開いてペリータルトを検索した。なぜかとっても、甘いフルーツとサクサクのクッキーみたいなものが食べたくなった。昨日結局私、ビスケット食べたんだっけ？食べてなかったっけ。あ、今朝ごはんも食べてなかった。ってことは昨日お昼食べてからちゃんとごはん食べてなかったってことだ。あれ？昨日お昼何食べたんだ？

とにかく疲れているのかもしれない。試験とか模試とかが終わったり、急に緊張が解けると甘いものが食べたくなる。普通のショートケーキじゃなくて、いっぱいフルーツが乗ったタルトとか、夏だとコールドストーンみたいな、アイスだけじゃなくて色々無駄に混ぜてるようなものが好き。

検索に出てくるのはクックパッドみたいなレシピが多くて、どれも一般人が作ってるようには見えないほど凝っていてつやつやに出て来ている。おいしそう。お腹が空いているわけじゃなくて、口の中に甘いさわやかな味を張りつけたくて、鞆の中を見てみても昨日買った水しか入ってなかった。なんか飲み物とかガムでも買っとけばよかったけど、とりあえず半分くらい残っていた水を一口飲んで、眠気で火照っていた喉が軋むほど冷やした。

今日は金がある。あつたはず。この前お小遣いをもらったばかりでまだ銀行に預け入れていなかったから、最低でも一万は入ってる。いや別に千円でも五百円でもいい。横浜まで行っちゃおう。いつものイタトマがやってなかったら、高いけどそごうか高島屋まで行こう。それかスタバで新作タルトみたいなのもあつた気がする。どこまでも食欲にタルトを探そう。食べたいと思ったものはお金があるなら食べたい。なんだかお腹はそこまで空いていないのに、頭がタルトだけになってしまった。電車の向かいにたとえ野島がいないくても：もし野島と一緒にタルトを食べにいったらそりゃ嬉しいけど：こういうときは、ひとりの方がどこまでも欲深く歩いていける。

電車が菊名についても、私は立ち上がらなかった。早く帰ろうよおくとお尻を浮かそうとする私もないわけじゃなかったけど、葉子もぐっすり眠りこんでいて、なんだか学校をさぼっているみたいな、ささやかな悪いことをしているみたいないな気分でちょっと嬉しく

なった。

「斎藤ってさ、結構ユイガドクソンだよね」

葉子と私は横浜で降りた。降りたがる葉子を引きずって、西口の相鉄ジョイナスの地下にある方のイタリアントマトまで連れてこさせた。昨日のことがあって営業していない店もある中、運よく通常営業をしていた。お腹も空いていたし、二人で食べて帰るかなって予想していたけれど意外と葉子が乗ってこなくて、五種のベリータルトを一つと、もしお母さんが家にいて後からアレ買ってきてコレ買ってきてって言われぬように、かぼちゃのプリンタルトを一つお持ち帰りすることにした。

「それさあ、唯我独尊って意味ちゃんとかわかってる？」

ショーケースの中で、それぞれの種類が丸く輪を作って並んでいてつかいケーキがひとつひとつ丁寧で、小麦粉や卵が人の手によってこんな形に作られているのが不思議だった。こんなに丁寧でこまやかなのに、昨日みたいに大きな地震や、誰かが突然トンじやってケーキにチョップかましたら一瞬でただの塊になっちゃうんだ。そう思うと、いつこのケーキやタルトはぶっ潰されるのか、可能性は無限大だ。

「自分の道貫くってことだよ」

「ちがうよ」

「ちがうよ斎藤が」

「マジ？」

天上天下唯我独尊って、私が一番偉いっていうの、違うんじゃないかって思った。唯我独尊だけだとそうなのかな。

「マジマジ」

「葉子には負けるよさすがに。私結構気に入ってるよん」

「気に入ってるかあ？」

「しまくってるよ」

よく大人がデイスる周りに流されるやつっていうの、きっと私はそれじゃあないとは思うけど、でもだからって怖い物無しでもないし、実際怖い物だらけだ。もし野島と会えたとして、そこでなんか万が一気持ちのストッパーが効かなくなって好きですもう一回付き合っつてとか言っちゃったとして、ちょ————嫌だけどフラれたとして、そしたら次の日から学校が恐怖で恐怖でたまらなくて不登校になっちゃうかも。周りにあいつフラれたんだぜとか言われちゃうんだぜ。気にし過ぎて、気にしてないように見られちゃうんだぜ。

「斎藤、フワフワしてるからね。カワイイ系ってことじゃなくて、いい意味でも悪い意味でも」

「カワイイ系は否定するのね」

「だってきゃぴきゃぴしてないから」

「私カワイイ系じゃないのか。モテないわけだこんなにカワイイのに」

「はは、死ね」

店員のお姉さんから箱を受け取る。乾いて冷えた手で箱の入ったビニールを受け取ると、案外タルトは軽かった。ずっしりありそうなのに、簡単に落としてぼろぼろにできちゃいそうだ。

「死ねってえ、いうなあ〜！」

まだ食べてないけど、三十分くらい煮えていた「欲しい」の達成が目の前で、足取りが軽くて楽しくなる。横浜から菊名は東横のほうが安い気がするからそっちで帰るけど、これで電車で野島がたま

たま乗ってたら、もう死んでもいいなあ。

「死ねって言ったやつが死ぬんだあ〜！」

自分でもちよつと驚くくらいに声が駅に響き渡った。どうしたどうしたと笑う葉子と私を、周りのひとたちが見てくる。

「ほんとうにありがとねえ、無事に帰ってねえ」

みなとみらい線と東横線に降りていくエスカレーターの前で、葉子と別れる。葉子は京急に乗り換える。もうちよつと、いろんな会社の改札がぎゅつと寄っていてもいいのにな。もう少し、楽しいままでいたいのがな。

「ケーキ落とすなよ」

「おとさねーよ！」

最後の会話がケーキ落とす落とさないのことで、なんでだろうって思っていたけど、言われた通りケーキ（というか正確にはタルト）を両手で前に抱えて、東横線のホームに降りた。少し期待をしたけれど、電車の中も菊名の駅で降りてツタヤの前を通っても、野島の影はどこにもなかった。すっぴんだけど、でもあんな話してたから偶然出会いたいって、ちよつとでも思ったから、偶然を起こしてもらえなかったんだ。



家について、玄関で革靴を脱ぐと足の指の間に汗をかいていたことに気付く。やっぱり昨日は、本当はよく眠れていなかったのか、暖房のきいている部屋に入ると冷えた頬と指先と脚はじんわり温まるけど、首とか手のひらとか足の裏が燃えるように熱かった。ぐっ

すり寝ても寝不足な日もある。手のひらが熱くなるのは、寝ろ！って体が言っているみたいで、それでも起きている間が一番体に悪そうなことをしているみたいだ。地べたに座って靴下を脱いでいると、一度大きく横に、箱の中のケーキが振られるように大きく揺れた。やっぱり怖くなったらけれど、タルトが食べられればいいかなって、目的が明確すぎて感覚さえ他人事になってくる。今の私は、タルトを食べるためだけに生きている。

食卓にケーキを置いて、とりあえず部屋着に着替える。コンタクトをはずして、テーブルに置きっぱなしだった眼鏡をかけて、テレビをつける。箱を開けると冷たく甘い香りが立つ。ひゃああーって、とつてもおかしなテンションが復活する。お皿とフォークを取ってきて、先に携帯で家族に帰宅メールを送って、やるべきことを片付け終わって、箱からベリータルトを取り出してお皿に乗せた。

『家も息子も全部流されたあ』

『なんにもない、もうね、なーんにも』

『目の前で知らない子供ですけど死んでいくんですよ氷みたいに冷たくて僕の手の中で死んでいくんですよおもう……ちよつとすみません……』

次々と流れるいろんな人の涙を見ながら、小さいつぶつぶのキイチゴみたいなのを、ぷちって噛んだ。酸味と生地のがさが丁度いい。こうゆう時間がとびきり幸せだよね。

瞬間、また大きくゴラリと、窓や家具がバリバリと割れるような、強烈な音が先に走って、バリーンと台所からガラスが割れる音がした。

………やばい、死ぬ。

(続)

弩真ん中を知る